

大切なものはなんですか indigenous community- ビラーン民族の村へ



現地の言葉で1~10までの数字を教えてもらったが、どうしても覚えられない私に、ジョモリが、手書きでノートにまとめてくれた。英語、タガログ語(フィリピン一般的な言語)、ビラーン語(自分たちの民族の言語)がわかるようになっていく。パソコンは持っていないと言っていたので、すべて手書きで勉強しているのだろう。次に会うまでに覚えておこうとおもった。

フィリピンの人たちは、自分たちがいつも笑顔でいること、ホスピタリティーにあふれていること、貧しくても、助け合い、分かち合うことを知っている。

初めての東南アジアの旅、渡航目的は事実を知ること、五感で確かめ、人々の暮らしとコミュニティの在り方、支援の在り方を学ぶことだった。HANDSのスカラーたちの逞しくもやさしい姿を忘れることはないだろう。いま、旅をふり返れば、滞在中よりも帰国後のほうがより、フィリピンを身近に感じているかもしれない。事実を知ることがどれほど強力で、現実の行動を変える力があることを感じずにはいられない。この旅のきっかけをくださった札幌の会員中田サトエさん、ご主人の故中田章二さんに、この場をお借りして心からの感謝をお伝えしたい。どうもありがとうございました。

(YUKIKO SHIMIZU)

いくつかの川を越え、ビラーン民族の暮らす村を訪れた。最小単位の部落をシチオといい50世帯くらいの人々が暮らす。この島の先住民族である彼らに、「人生でいちばん大切におもうものは何か？」と質問してみた。村の伝統的な祈り、歌と衣装で迎えてくれた老女たちは、「教会で行う祈りがある。けれども、我々には祖先から受け継いできた祈りがある」そう昔ながらの言葉で語った。彼女たちの孫世代はどうだろう？ ミアソンまでの道のりを案内してくれたジョモリは「教育」と答え、ライアンは「家族」と答えた。2人とも今はジェネラルサントスの大学へ日本からの奨学金を受けながら通う。彼らが生まれ育った村で、茹でたバナナ、フレッシュグリーンマンゴー、パパイヤとモーリンガーの地鶏スープ、そしてライスでもてなしを受けた。1960年代、日本の高度成長期にフィリピンの樹々は乱伐され、日本のコンクリート型枠材として使われた。すべてを伐採したあとに企業は次の資材を他の国に求めた。トラックの荷台に揺られながら3人で話しあう。子どもたちのために出来ることは何だろうか。「自然を愛すること、平和であること」入植と伐採が続く山々を見ながらジョモリが答えた。「僕たちはユニオンをつくる事が出来る！」ライアンが笑顔でうなずく。「そう！今この場がそうであるように」私は彼らと話しあったことを日本の友人たちに伝える、と約束した。



ENGLISH#	TA TAGALOG	BIIRAN (By Origin Language)
Good Morning	Magsalung Umaga	Faw Fawpac
Good Afternoon	Magsalung Hapon	Faw Hable
Good Evening	Magsalung Gabi	Faw Kukul
How are you?	Kamusta ka	Kamusta ka
Nice to meet you	maayya alang makilala ka	Bayan ago di ali bay
Thank you	salamat	Bayan kamatan
Goodbye	Paalam	Kamali agay
Take Care	Alas-ingat	Alagat
Eat	Kumain	Alaman
Happy	Maaya	Bayan
How old are you?	Ilang taon Lana?	Fila Estand an
What is your name?	Angang Pangalan mo?	Git anggit an
Name	Ima kay	Quinn
I love you	Makahi Kita	Koobi to gu
Girl	Batare	Lihan
Boy	Talibi	Ing
Beautiful	Magsanda	Faw Kawak
Sea	isa	awak
Two	dalawa	alaw
Three	tatlo	atlo
Four	apat	apat
Five	lima	limu
Six	anim	nam
Seven	pito	Fila
Eight	walho	walho
Nine	siyam	siyam
Ten	ampung	ampung